

【4】

阿波から都へ～三好氏の時代～

1 生徒用資料解説

三好長慶画像（大阪府堺市南宗寺所蔵）

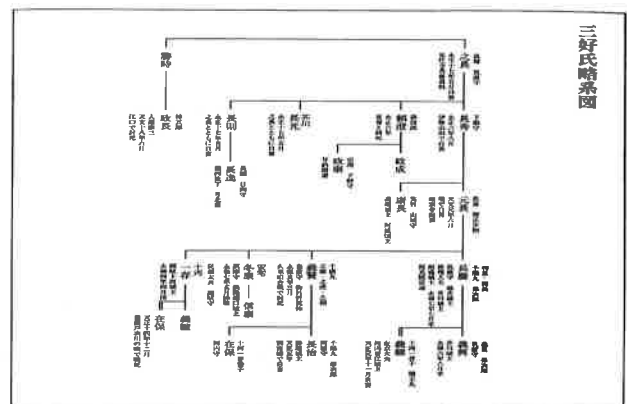
南宗寺は三好長慶が建立した寺院で、三好氏一族の墓所となっている。長慶は三好氏の最盛期を築いた人物で、父元長が死去した翌年の天文2(1533)年、わずか12歳で本願寺と細川晴元の講和を仲介。以後、父の仇でもある晴元の被官として専ら畿内で活動した。軍事的危機の時には、四国・淡路を押さえていた弟義賢・安宅冬康・十河一存が大軍を率いて兄長慶を支援。長慶は天文17(1548)年に主君晴元に背いて自立。天文22(1553)年には將軍不在となった京都を支配し、以後、5年余り、政治の実権を握った。長慶は優れた武将であったが、人柄は、敵であっても降伏すれば命は助けたことから温厚で寛容であったと評価され、和歌・連歌を愛好した優れた文化人としても知られている。生没年は1522年～1584年。

戦国大名三好氏の最大領地（今谷明『戦国 三好一族』所収図版に基づいて作成）

三好氏の支配領域については、年代、政治状況によって変遷があつて、一概に示すことはできないが、本図は今谷明氏が『戦国三好一族』において、三好長慶最盛期の領地を示したものに依拠した。この時には、山城（京都府）・摂津（大阪府）・河内（同前）・和泉（同前）・大和（奈良県）の一部・讃岐（香川県）・阿波（徳島県）・伊予（愛媛県）の一部・淡路（兵庫県）・丹波（京都府・兵庫県）の一部・播磨（兵庫県）の一部を領地とした。三好政権の主な拠点城郭としては、長慶の支配拠点は越水城（兵庫県西宮市）・芥川城（大阪府高槻市）・飯盛城（大阪府大東市）と変遷、弟義賢は勝瑞城（徳島県藍住町）・高屋城（大阪府羽曳野市）、同じく弟の安宅冬康は矩ノ口城（兵庫県洲本市）、十河一存は十河城（香川県高松市）・岸和田城（大阪府岸和田市）、重臣の松永久秀は信貴山城（奈良県平群町）・多聞山城（同県奈良市）などであった。

三好氏の系図

三好氏は鎌倉幕府の阿波国守護小笠原氏の末裔が三好郡に居住し、地名を名乗った氏族と伝えられる。ここでは近畿地方で活躍した三好之長・元長・長慶の三代と、長慶に協力した兄弟の関係を示した。特に、長慶の力が、兄弟によって支えられていたことを十分に説明する。



三好之長画像（藍住町見性寺所蔵）

之長は長輝とも称したことから、三好長輝肖像画として一般に知られている。之長は澄元の後見人として管領細川氏の被官となった後、敵対したもう一人の養子澄之とその支持者との対立・抗争を通じて頭角を現し、後の三好氏の発展の土台を作った人物である。永正17(1520)年、合戦に敗れ、京都百万遍で自害。

「兵庫北関入船納帳」に記された阿波の港

文安 2(1445) 年に「兵庫北関」に入関して、記録された船の船籍地として記載された阿波の港を示したもので、当然ながら、これ以外にも各地に港があった。なお、「惣寺院」は現在地名が伝わらないため、所在地は正確には不明であるが、藍を積み出した船の船籍地であったことから、吉野川河口部付近と考えられている。

阿波の港から積み出された産物

「兵庫北関入船納帳」に記載された阿波国の港に所属する船舶が積載した積荷を示したもの。阿波国南部は榑・材木が主体。阿波国北部では穀物・胡麻・藍などが中心。なお、このほかに、「兵庫津」に所属する船が、阿波から「阿波塩」・「藍」を大量に運んだことや、淡路島の「由良」船が榑を大量に運搬していたことも判明する。

勝瑞から出土した遺物の写真

藍住町教育委員会所蔵。勝瑞では平成 6 年度から発掘調査が開始されて以来、膨大な量の土器・陶磁器などの出土品が蓄積されている。本写真は特に茶道に関係する遺物の一部を示した。

三好義賢は著名な茶人であり、堺の商人とも度々茶会を開いた。勝瑞でも茶会が盛んであったことが多数の茶道具の出土から明らかになる。

2 発展的資料について

「兵庫北関入船納帳」

本史料は京都灯心文庫所蔵。もともとは奈良東大寺所蔵で、東大寺が管轄していた兵庫北関（神戸市）の通関記録であり、文安 2 年のほぼ 1 年間のものが伝来し、瀬戸内・九州の諸国から兵庫北関に入関した船舶・積荷とその量・船頭・問丸などが詳細に記載される。阿波国関係の港・船舶に関する記載も極めて多数に上っており、中世後期の阿波の水運・産物の具体的な姿を伝えてくれる貴重な史料となっている。



〈記載内容について〉

- 入関月日（左は 7 月 1 日入）
- 船籍地（最上段・末尾から 2 行目に突喰が見える）
- 積載品 ○積載量
- 関銭 ○関銭納入日
- 船頭名 ○問丸名

「兵庫北関入船納帳」の記事

区 分	積 載 品								
	樽(石)	材木(石)	米(石)	大麦(石)	小麦(石)	藍(石)	胡麻(石)	アラメ(石)	阿波塩(石)
阿波の港津	土佐泊			1212	1515	10	4		
	撫養					6	30		
	別宮							41.5	
	惣寺院						14		
	平島	735	1095						140
	橋	430							
	車枝	1680							
	海部	9440							
穴壁	2210	250							
合 計	14495	1345	1212	1515	16	48	41.5	140	
参 考	地下	3620	260				371		480 305
	由良	14100					23		265 300
合 計	17720	260				394		745 605	

○品目別の数量を示した。

○「参考」として「地下」（じげ・地元の兵庫津のこと）「由良」の船舶が樽・材木・藍・阿波塩などを大量に運んだことを示した。

阿波の港津から運ばれた産物

三好元長画像（*画像は省略）

藍住町見性寺所蔵。徳島県指定有形文化財。三好元長は之長の孫で長慶の父。元長は大永 6(1526)年に細川澄元の子晴元を擁して阿波から堺に上陸。敵対する足利義晴・細川高国を破って、足利義維を将軍に就け、堺でそれまでの幕府に代わって政治を行った。（そのため堺幕府と呼ぶ研究者もいる。）しかし、享禄 2(1529)年に柳本賢治等と対立し、阿波に帰国してからは内部対立が絶えず、勢力が弱まった。最後は天文元(1532)年に本願寺一向一揆に攻められ、堺の顕本寺で自害した。

三好実休画像（*画像は省略）

大阪府堺市妙国寺所蔵。実休は法名。妙国寺は実休（義賢）が深く帰依した日蓮宗の寺院。実休は長慶の次弟で、兄が中央に進出して活動したことから、兄に代わって阿波及び当時実質的に三好氏が支配下に置いていた讃岐国を勝瑞を拠点として統治した。阿波では当初は守護細川持隆に仕えたが、天文 22(1553)年に持隆を勝瑞で自害に追い込み、幼主真之を守護に立て、実施的に阿波の国主となった。実休は武将として活躍しただけでなく、茶人としても知られ、堺などでの茶会の詳細な記録である「茶会記」に、他の三好一族とともに度々登場する。後に実休は河内国を与えられ、高屋城に移り、永禄 4(1561)年には幕府御相伴衆に列したが、翌年 3 月の和泉久米田（大阪府岸和田市）の合戦で、畠山高政に敗れて戦死した。

国史跡「勝瑞城館跡」

守護町勝瑞遺跡 Official Web Site <http://www15.ocn.ne.jp/~shouzui/index.html>

3 参考文献

- 天野忠幸『三好長慶』ミネルヴァ書房、2014年。
- 今谷 明『戦国三好一族』新人物往来社、1985年。
- 徳島城博物館『平成 13 年度秋の特別展 勝瑞城館国史跡指定記念 勝瑞時代 三好長慶天下を制す』2001年。
- 第 22 回国民文化祭藍住町実行委員会『戦国浪漫 勝瑞探訪 よみがえる三好氏の文化』2007年。

4 目標と本時

授業の「目標」

身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味や関心を高め、様々な資料

を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる。

本時の目標

- ・身近な地域の歴史として、阿波出身の戦国大名三好氏を取り上げることにより、戦国時代及び戦国大名に対する興味や関心を高める。
- ・中世後期の阿波の水運の発達の様子と、当時の産物について、具体的な史料に基づいて取り上げる事により、戦国大名三好氏の経済的基盤等に対する理解を深める。
- ・三好氏が本拠とした勝瑞の発掘調査を通して、埋もれていた歴史の解明が進められていることについても理解を促し、遺跡や文化財に対する愛護精神の涵養を図る。

5 評価規準と評価方法

評価規準の設定	評価方法
世界や日本の中における徳島の伝統と文化について、公正に判断する。	○戦国時代の日本歴史の中に三好政権が正しく位置づけられているかが評価のポイントとなる。
徳島の伝統と文化の魅力を、県内外で主体的に発信できる。	○三好氏が阿波出身でありながら、なぜ中央へ進出することができたのかについて理解できているかどうか、また、三好氏が中央で活動できた背景に阿波の経済力・軍事力があることを理解しているかどうか、さらには中世阿波の政治拠点としての勝瑞についてその場所を説明できるかどうかを評価のポイントとなる。

6 板書計画

(1) 戦国大名三好氏

- ・阿波国三好地方出身。
- ・之長・元長・長慶と3代にわたって近畿地方に進出。
- ・長慶の活動を義賢・冬康・一存の兄弟が支援。←阿波の軍勢も度々渡海。
- ・長慶の時、最大8か国の戦国大名として、近畿地方を支配。
- ・この時、阿波国内でも義賢が天文22(1553)年に細川氏を討つ→三好政権の全盛期。
- ・永禄7(1564)年、長慶病死。→三好三人衆・松永久秀・篠原長房の活動。
- ・永禄11(1568)年、織田信長上洛。→三好政権崩壊へ。

(2) 中世阿波の港と産物

- ・活発な水運の展開 (『兵庫北関入船納帳』に阿波の港・産物の記事)
- ・阿波の特産物 (材木・藍・塩など)

(3) 戦国城下町勝瑞の発展

- ・細川氏・三好氏の政治的拠点。
- ・当時の文化先進地・堺(大阪府)との活発な交流=茶会など。
- ・国史跡「勝瑞城館跡」の発掘調査によって堀跡・庭園跡、土器・陶磁器など出土。

(4) まとめ

- ・近畿地方と阿波との密接な歴史的つながり→歴史的視点での検証へ

7 授業展開例

	学習活動	指導上の留意点
導入	<p>○戦国時代・戦国大名についての学習内容を復習。</p> <p>○本時の学習内容の予告を聞き、地元徳島とも関係の深い内容であることを理解する。</p>	<p>○既習の戦国時代・戦国大名の学習内容を簡潔に振り返り、本時の学習の時代背景等を理解させる。</p> <p>○本時の学習内容を予告し、身近な歴史を通して戦国時代に対する興味関心を喚起する。</p>
展開	<p>○三好氏が戦国大名として成長するまでの過程を理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・三好長慶の画像とその領地を示した地図を見て、戦国大名三好氏の存在を知る。 ・三好氏の出身地をその名字から推定し、発表する。 ・三好氏がなぜ中央政界で頭角を現すことができたのか、その理由を理解する。 ・三好長慶がなぜ近畿から四国にかけての広い領地を支配することができたのか考え、話し合う。 ・三好政権の下での阿波と近畿地方との関係について考え、意見を発表する。 <p>○阿波の特産物と水運についての理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「兵庫北関入船納帳」が当時の歴史を考える上で貴重な史料であることを理解する。 ・阿波の港から運ばれた産物を示した表を見て、気がついたことをそれぞれ発表し、阿波の特産物について理解する。 ・中世阿波の港の場所を地図で確認し、それぞれの地域の産業について考える。 ・当時の阿波と近畿地方との交通・運送について意見を発表する。 <p>○阿波三好氏の拠点「勝瑞」が中世地方都市として発展したことを理解する。</p>	<p>○複雑な政治過程のため、主要事項のみを簡潔に整理して理解させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・肖像画の説明の時には、優れた文化人であったことなど、人間像についても取り上げる。 ・三好氏が小笠原氏出身と伝えられていることも合わせて紹介する。 ・管領細川氏の家督争い（両細川の乱）にも簡単に触れ、三好氏が細川氏の権勢に支えられていたことを理解させる。 ・長慶と義賢などの兄弟について簡略に説明し、一族の協力関係に気づかせる。 ・三好氏が海を取り込んで領国支配を行ったことから、当時の海の役割についても考えさせる。 <p>○三好氏の活動の背景に経済力と水運の力が不可欠であったことを理解させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歴史が良質の史料に基づいて解明されるものであることを具体的に理解させる。 ・材木は西国では最多、藍は唯一、塩は「阿波塩」と呼ばれることから、それぞれ有力な特産物であったことを理解させる。 ・港の場所と積荷が、その周辺の産業（生産）と深く繋がることに気づかせる。 ・前近代の社会における水運の重要性について理解させる。 <p>○勝瑞が阿波国の中心地として発展していたことを通して、時代によって中心地が変遷す</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・中世の町としての勝瑞が持つ「特徴」について気がついたことを発表する。 ・勝瑞の発掘調査の成果を基に、勝瑞の町の姿について意見を出し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ることを理解させる。 ・吉野川河口デルタ地帯という地理的条件の持つ意味について考えさせる。 ・報道等を通して知っていることを積極的に発表させ、日頃から郷土の情報に対する興味関心を高めておくことの重要性に気づかせる。
結論	<ul style="list-style-type: none"> ○阿波出身の三好氏が信長・秀吉登場以前の京都・日本の歴史に大きな足跡を残したことを理解する。 ○阿波と近畿地方が歴史的にも密接に関連していることを理解し、地域社会の形成を歴史的な視点から理解しようとする意欲を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○現在の京都・大阪に当時の遺跡などが数多く伝わっていることも合わせて紹介することにより、今後の興味関心につなげる。 ○現代的視点だけで京阪神地区との関係を考えるのではなく、中世という歴史上の時点でも彼我の関係性を考える視点の重要性に気づかせる。